

22

IVUS (血管内エコー) 併用によるDCAの評価

東京医科大学八王子医療センター 循環器内科
河村 紀世、内山 隆史、小林 裕、田村 憲、
大久保 涼子、笠井 龍太郎、加藤 富嗣、
豊田 徹、吉崎 彰、永井 義一
東京医科大学内科第二講座 伊吹山 千晴

目的

PTCA後の再狭窄率は40~50%であり、再狭窄がPTCA治療の大きな問題になっている。近年、再狭窄率の低下が期待されるnew deviceの一つとしてDCAが開発された。しかし、CAVEAT trialでは再狭窄率50%と不良であった。そこでbigger is betterの概念の通り、IVUSを併用し内腔を大きくすることにより再狭窄率が低下するかどうか検討した。

対象

1993年3月から1994年6月までにDCAを施行し、6ヶ月後の再評価ができた16名で、無作為にIVUSを併用した8名(IVUS+)とIVUSを併用しなかった8名(IVUS-)にわけDCAを施行した。

方法

IVUS+群はDCA施行前にIVUSを施行し、病変部及びreference areaを観察した。5psiにて全周性にcutし、再度IVUSを施行して内腔を観察した。内腔が3mm以上になる迄5psiずつ圧を上げてcutした。又、IVUS-群は造影所見で狭窄率が、0%に近くなる様に5psiずつ圧を上げてcutしていった。

結果

IVUS+群の再狭窄率は前; 68.5%、直後; 23.7%、6ヶ月後; 22.4%であり、又IVUS-群の狭窄率は前; 79.3%、直後; 18.0%、6ヶ月後; 31.7%であり6ヶ月後の狭窄率はIVUS+群で有意に少なかった($p < 0.05$)。

考察

IVUSを併用したDCAでは確実に、かつ安全に内腔を十分に拡張することができ、再狭窄予防に有用であった。

23 都内アスレチッククラブ 会員男性における運動量と冠危険因子及び運動耐容能についての検討 ~5年間追跡調査から~

(衛生学公衆衛生学)

○小松 尚子 岩根 久夫 勝村 俊仁
下光 輝一 大谷由美子 浜岡 隆文
小田切優子 藤波 襄二

【目的】都内某アスレチッククラブの会員で外見上健康な中高年男性を対象とした5年間の追跡調査から、アスレチッククラブ内での運動が、運動耐容能を含む冠危険因子プロフィールに与える影響について考察した。

【対象・方法】都内某アスレチッククラブにて、1974~1993年に医学検査を受けた748名のうち、心血管薬・高脂血症治療薬を服用しておらず、初回から5年後まで追跡が可能であった40名の男性(初回時平均年齢48.0±7.4才)を対象とした。身長、体重、Body Mass Index (BMI)、胸囲、腹囲、安静時心拍数・血圧、総コレステロール、中性脂肪、尿酸、血糖を測定し、症候限界性最高運動負荷試験(自転車エルゴメーターによる)を行い、最高酸素摂取量(Peak-VO₂)を推定した。また自記式質問票によりアスレチッククラブ内での1ヵ月あたりの運動時間を調査した。

【結果】対象者全体では、アスレチッククラブ内での1ヵ月あたりの運動時間は初回検査時3.4±2.8時間、5年後は3.6±3.9時間であった。このうち5年後に運動時間が増加した者(以下増加群)は13名、不変であった者は6名、減少した者は18名(以下不変・減少群24名)であった。増加群の1ヵ月あたりの運動時間は、初回検査時平均4.0±3.4時間から5年後には平均7.8±3.5時間へと増加し、不変・減少群では初回検査時平均3.2±2.5時間から5年後には平均1.3±1.7時間へと減少した。初回検査時、各検査項目に関して2群間に差はなかった。運動時間増加群の平均Peak-VO₂は、初回検査時と比較して5年後に有意に上昇し($p < 0.05$)、32.3±7.7 ml/kg/minとなり、不変・減少群の27.3±5.6 ml/kg/minと比較して有意に高値を示した($p < 0.05$)。収縮期血圧、拡張期血圧に関しては、初回検査時および5年後とも2群間に差は認められなかった。一方、安静時心拍数は、増加群では5年後に有意に減少し($p < 0.01$)、平均56±5/minとなり、不変・減少群の66±12/minよりも有意に低値となった($p < 0.05$)。安静時Double Productも増加群では5年後に有意に減少し($p < 0.01$)、平均7332±1238.9となり、不変・減少群の平均8523±2237.8よりも有意に低値となった($p < 0.05$)。また、血中総コレステロール、中性脂肪等の他の検査項目については、初回検査時と比較して5年後に有意な変化は認められなかった。

【考察】外見上健康な中高年男性を対象として5年間の追跡調査を行った結果、アスレチッククラブでの積極的な運動は、加齢による運動耐容能の低下を防止し、運動耐容能の増加と安静時心拍数の低下、および心筋酸素消費量の指標であるDouble Productの減少をもたらすと考えられた。以上より、中高年者がアスレチッククラブを利用し、積極的に運動することにより、良好な冠危険因子プロフィールが得られることが示唆された。